

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(2年計画の1年度目)

1. 研究課題

(和文) 啓蒙とフランス革命・I—1793年の研究

(英文) The Enlightenment and the French Revolution: I. A Study of the Year 1793

2. 研究代表者

(氏名) 富永 茂樹

3. 研究期間

平成22年4月から平成24年3月まで

4. 研究目的 (400字程度)

18世紀のヨーロッパで成長をつづけたいわゆる「啓蒙哲学」は、世紀の終わりにいたりひとつの大きな転機を迎える。すなわちフランス革命であり、ここには啓蒙思想が革命の思想へと転化すると同時に、革命の進展が啓蒙の観念を変形させてゆく過程を見て取ることができるであろう。本研究は桑原武夫教授がはじめた『ルソー研究』や『フランス革命の研究』以来の当研究所における蓄積をふまえたうえで、あらためてフランス革命期、とりわけその絶頂期ともいえる1793—94年のモンターニュ派独裁期に目を向けることにより、ある観念の特質を現実の政治=社会のコンテクストのなかに位置づけるとともに、他方で政治的なるものを意識=文化とのかかわりをとおして理解することを目的としている。そうした目的に到達するために、まずは当時のテキスト(ロベスピエール、サン=ジユストたち)を読み解き、そこからいくつかの問題を発見することが試みられる。

5. 本年度の研究実施状況 (400字程度)

本年度は、合計して18回の研究会を開催して、ロベスピエール「共和国の諸原理と道徳的宗教的処理念との関係について、および国民祭典について」(1784年5月7日)、ダントン「公安委員会を臨時政府にする必要について」(1793年8月1日)、サン=ジユスト「革命政府の必要性について」(1793年10月10日)、ロベスピエール「共和国の政治的状況について」(1793年11月17日)という、国民公会で展開された3編のディスクールの解説をつづけるとともに、1793年という年についての全体的な見とおしについて、またロベスピエールの「最高存在の祭典」に見ることのできるジャン=ジャック・ルソーの思想的影響について、個別の研究報告を行い、さらにジャン=クロード・ボネ教授(パリ第7大学)に「芸術的歴史の誕生：シャトーブリアン、メルシエ、ミシュレールノワールのフランス記念碑博物館を訪れた人びと」と題する講演をいただいた。

6. 研究成果の概要（400字程度）

上記のディスカールの会読は、そこで用いられる言語表現、話者の経歴、背景にある思想および政治的上状況について、詳細な分析を行うものであったために、予想した以上の時間を必要とし、したがってかぎられた数のものをしか扱うことができなかったが、にもかかわらず、ここからはとりわけ18世紀に用いられた言語表現の政治的状況への流入、「古代ギリシア・ローマ」の重要な参照項目としての継承、革命的主意主義の誕生と成長など、革命期における啓蒙思想の受容と変容のさまについて今後さらに理解を進めてゆくうえでの大きなてがかりのいくつかをもたらしてくれるものであった。またボネ教授の講演は、主として恐怖政治期以後に設立された博物館を中心とするものではあったが、歴史的知識が文化的施設としてかたちを取り、それがさらには後の時代の歴史家を形成する端緒を明らかにすることで、啓蒙が18世紀から19世紀へと受け継がれてゆくさいの微妙かつ複雑な経緯にたいする視角を強調する点で、今後の共同研究にとって多大の示唆をもたらした。

7. 共同研究会に関連した公表実績（出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など）

共同研究参加者のうちの数名は本研究と並行して、これに先立つ共同研究の成果報告書の編集作業にも従事し、富永茂樹編『啓蒙の運命』（名古屋大学出版会、2011年3月）として公刊するにいたった。また本研究の主題に関連するものとして、ミシェル・フーコー（王寺賢太訳）『カントの人間学』（新潮社）、桑瀬章二郎編『ルソーを学ぶ人のために』（世界思想社）、富永茂樹著『トクヴィル―現代へのまなざし』（岩波新書）などの、共同研究参加者による著書が本年度のうちに刊行された。富永は国立大学附置研究所・センター長会議の第三部会が、11月5日に東京大学東洋文化研究所で開催したシンポジウム『民主主義のゆくえ』に出席して「平等の政治哲学―トクヴィルを読む」と題する報告を行った。さらに前記のボネ教授の講演は公開講演としたので、本共同研究の枠を超えて、京都大学内・外から多数の聴取者の関心を集めることができた。